

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 24 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03934

研究課題名(和文)高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力の構造

研究課題名(英文)The structure of compassion for volunteers involved in the prevention of loneliness among the elderly

研究代表者

村社 卓(Murakoso, Takashi)

岡山県立大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：80316124

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力の構造を明らかにすることである。特にボランティアの共感力について、高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加するボランティアの継続要因の視点から明らかにした。高齢者の孤立予防に関わるボランティアは、どのような要因、感情、行動から「カフェ」に継続的に参加するのか。ボランティアの共感力に焦点を当てた。加えて、日韓の比較検討を行った。以上の作業から、高齢者の孤立予防的な対策について、ボランティアの共感力の視点からの知見を提示できた。それは超高齢社会に最適な「東アジア型ソーシャルワークモデル」の基礎資料となるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的な特色は地域で孤立しがちな高齢者に直接関わるボランティア活動を対象とした定性的調査を通して得られたデータを基礎に、ボランティアの共感力の構造化と定義化を試みた点である。ボランティアは孤立死問題等に直接関与している。活動継続のカギは過度の共感を抑えることである。しかし、共感の制限は困難であり対策が必要となる。独創的な点は、高齢者の孤立死問題についてボランティアの共感力から検討したこと、高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力について日韓の比較検討を行ったことである。後者は、韓国でのボランティア活動との比較検討により、ボランティアの共感力に関して新しい知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the structure of compassion for volunteers involved in the prevention of the loneliness among the elderly. In particular, the compassion of the volunteers was clarified from the viewpoint of the continuation factor of the volunteers participating in the community cafe for the purpose of the prevention of loneliness among the elderly. From what factors, emotions and behaviors, volunteers participating in the prevention of the loneliness of the elderly people continuously participate in the cafe. We focused on the compassion of the volunteers. In addition, we compared Japan and Korea. From the above-mentioned work, we were able to present findings from the perspective of volunteer compassion for preventive measures against the loneliness of the elderly. It is the basic material of the "East Asian type social work model" that is most suitable for super aged society.

研究分野：ソーシャルワーク論

キーワード：高齢者の孤立予防 ボランティア 共感力 定性的データ分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

高齢者領域におけるボランティア継続に関する研究の特徴は以下の3点である。対象別の研究は多いものの、高齢者の孤立予防に関連する研究は少ない。継続について、「要因」も含め構造的に明らかにした研究は少ない。そして、研究方法の多くは定量的データおよび分析によるもので、定性的データおよび分析を用いた研究はほとんど見当たらない。また、援助者の「共感疲労」に関しては、虐待児童に関わる援助者への支援(藤岡2011;2012,中村2012,趙2014)、犯罪被害者の援助者への支援(福島円2010)を中心に、多数の定量的研究が取り組まれている。しかし、高齢者の孤立予防に関わるボランティアを対象とした研究は、ボランティアの継続要因について「楽しさ」に焦点をあてた研究(村社2018)を除き、定量的、定性的ともにほとんど確認することはできない状況にある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力の構造を明らかにすることである。特に、ボランティアの共感力について、高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェ(以下「カフェ」と省略する)に参加するボランティアの継続要因の視点から明らかにする。高齢者の孤立予防に関わるボランティアは、どのような「要因」「感情」「行動」から「カフェ」に継続的に参加するのか?ボランティアの共感力に焦点を当てるものである。加えて、ボランティアの継続要因に影響を与えるスタッフ(コーディネーター、医療専門職、ボランティア等)による支援の特性についても明らかにする。さらに、上記の結果を踏まえて、高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力について、日韓の比較検討を行うことにする。

## 3. 研究の方法

本研究では、研究方法として定性的(質的)研究方法を用いた。

### 1) 調査概要

#### (1) 日本での調査

調査地域は、大都市A区のB地区である。「カフェ」の目的は高齢者、介護者の孤立予防、区民相互の支え合いの活性化である。対象者は一人暮らし高齢者、認知症高齢者、介護者である。B地区の場合、開催は3か所の団地集会所で月4回(水・土曜日1回、木曜日2回)である。時間は13時から15時までの2時間。参加費は200円。参加者にはお茶と簡単なお菓子が提供される。スタッフの構成は、コーディネーター、医療専門職、ボランティアである。その他、地域包括支援センターの職員も常時参加している。B地区の場合、コーディネーターはNPO団体のメンバーである。その主な役割は、区との運営交渉、団地集会所の使用交渉、福祉関係者への対応、ボランティアの管理である。医療専門職は保健師と看護師である。現役者だけでなく退職者も含まれる。主な役割は、血圧測定と医療相談である。ボランティアは同じA区の住民でほぼ全員が女性の高齢者である。3日間の研修を受講して参加している。主な役割は、会場設営、お茶出し、話し相手である。

#### (2) 韓国での調査

調査地域は、大都市C市D地区と大都市E市F地区である。調査対象は両地区における「老人(総合)福祉館」「敬老堂」でのボランティアの活動である。「老人(総合)福祉館」の主な機能は、敬老堂管理事業、余暇支援事業、健康支援事業、生活支援事業、地域交流事業である。ボランティア活動の分野は、相談事業、ケース管理事業、敬老堂活性化事業、無料求職事業、社会教育事業等である。所属する専門職は、看護師、社会福祉士、生活管理士等である。一方、「敬老堂」の主な機能は、地域高齢者への福祉サービス(休息、余暇等)の提供であり、運営

主体は高齢のボランティアである。

## 2) 調査方法

調査方法は参与観察とインタビューである。

### (1) 参与観察

参与観察は2013年8月から2016年11月まで(予備調査の期間を含む),調査者が「カフェ」に参加して単独で実施した(参加回数40回)。調査者はスタッフの1人として参加した。主な観察項目は、「ボランティアの継続要因」「ボランティアへの支援内容」である。観察内容は「フィールドノート」に記録した。対象者は、ボランティア27名(全員女性,平均年齢69.0歳),スタッフ7名(女性6,男性1),関係者(地域包括支援センター,区役所,居宅介護支援事業所等の職員)11名(女性7,男性4)である(2016年10月1日現在)。韓国での参与観察は,2017年6月(2回),9月(2回),2018年3月(1回)である。場所は,C市D地区およびE市F地区の「老人(総合)福祉館」,C市D地区の「敬老堂」である。調査者は,そこでの活動に参加して観察を実施した。主な観察項目は,日本での調査と同様「ボランティアの継続要因」「ボランティアへの支援内容」である。観察内容は「フィールドノート」に記録した。対象者は,ボランティア4名(全員女性),スタッフ4名(全員女性),利用者6名(全員女性)である。

### (2) インタビュー

インタビューは2013年3月から2016年3月まで(予備調査の期間を含む),主にスタッフ,関係者に実施した(回数15回,人数16名,時間13時間10分)。場所はNPO法人事務所等である。方法は,個人およびグループ対象のフォーマルインタビューである。主な質問項目は参与観察の観察項目と同様である。内容は調査協力者の了解を得たうえ,ICレコーダーで録音し逐語記録を作成した。韓国でのインタビューは,2017年6月,9月,2018年3月に,主にスタッフ(館長,社会福祉士,生活管理士,ボランティア),関係者に実施した(回数5回,人数6名,時間4時間15分)。場所は,C市D地区では老人総合福祉館,E市F地区では老人福祉館である。方法は,個人およびグループ対象のフォーマルインタビューである。主な質問項目は参与観察の観察項目と同様である。内容は調査協力者の了解を得たうえ,ICレコーダーで録音し逐語記録を作成した。

## 3) 分析方法

分析方法は定性的(質的)コーディングである。分析では「データ,コード,カテゴリーの一覧表」(村社2011)を作成することで,理論生成の根拠の提示,分析プロセスの明示の要求に込えている。定性的コーディングの手続きは,以下の3段階に分けられる(村社2018)。参与観察およびインタビューにより得られたデータから「コード」を生成した。「コード」の整理および先行研究との比較を行い「カテゴリー」を生成した。複数の「カテゴリー」を「理論(モデル)」に統合した。この作業は繰り返された。分析では,着目したデータの部分から「コード」を生成し,解釈の可能性をデータでひとつひとつ確認する作業を繰り返すことで,データ解釈の厳密性の要請に込えている。データ分析の結果についても,前述の調査協力者に説明し内容を継続的に確認してもらうなど,分析結果の妥当性と信頼性を確保している。

## 4) 倫理的配慮

調査では,研究目的・方法等を調査協力者全員に説明し同意を得ている。その結果についても,調査協力者にできる限り確認してもらったうえで,発表の許可を得ている。その他,本論文では,氏名,調査年月日,地域等を伏せることで調査協力者が特定できないようにしている。なお,調査の実施にあたっては岡山県立大学倫理委員会(番号343)によって承認されている。

#### 4. 研究成果

本研究での成果は、以下の5点について明らかにしたことである。

##### 1) ボランティアの継続要因の構造

第1に、ボランティアの継続要因の構造について明らかにした。

高齢者の孤立予防に関わるボランティアの継続要因は、「共感の再構成を目指した共感の集中および制限と離脱」と表現することができる。「共感の再構成を目指した共感の集中および制限と離脱」とは、ボランティアが「共感への集中」や「共感の制限」との相互関係を通して「共感の再構成」を行うことであり、「共感の再構成」と「共感の制限」は「共感からの離脱」とも相互関係にある。ボランティアの継続には、それまでの共感を「再構成する」ことが重要であり、そのため共感を「集中する」「制限する」、時には「離脱する」機会が必要となる。福島は、「活動頻度」と「内容選択」がボランティアの共感疲労への耐性を高めると指摘している（福島 2010）。本研究では、この「制限」に加えて「離脱」を強調している。加えて、その前提となる「集中」の機会が必要となることを構造的に明らかにしている。

##### 2) ボランティアへの支援特性の構造

第2に、ボランティアへの支援特性の構造について明らかにした。

ボランティアの継続要因への支援特性は、「関与の確認を目指した関与の調整および限定と分散」と表現することができる。「関与の確認を目指した関与の調整および限定と分散」とは、スタッフによるボランティアへの「関与の調整」「関与の限定」、そして「関与の分散」により「関与の確認」を行うことである。ボランティア活動の継続には、これまでの関与について「確認する」ことが重要であり、そのためには関与を「調整する」「限定する」、時には「分散する」支援が必要となるのである。また、上記の成果を時系列で整理するならば、「共感への集中」は「関与の調整」により「今ここで集中的に共感する」ことである。「共感の制限」は「関与の限定」により「今ここで共感を制限する」ことである。「共感からの離脱」は「関与の分散」により「今ここで共感せずに離脱する」ことである。そして、「共感の再構成」は「関与の確認」により「未来に向けて共感を再構成する」ことである。このことは、継続要因が現在志向から未来志向へと変化することを意味している。活動を継続できるボランティアは、時には「今ここで共感せずに離脱する」余裕をもって、「今ここで集中的に共感する」と「今ここで共感を制限する」で、「未来に向けて共感を再構成する」のである。

##### 3) ボランティアの継続要因と共感力の関係

第3に、ボランティアの継続要因と共感力の関係解明に向けて示唆を与えた。

高齢者の孤立予防に関わるボランティアの「共感疲労」と「共感満足」の要に位置するのが「共感力」である。「共感疲労」が増大するとボランティア活動は「活動中止」へと進む。一方、「共感満足」が増大するとボランティア活動は「活動継続」へと発展することになる。そして、この「共感力」を支えるのがボランティア自身による「社会貢献願望」と「自己実現願望」である。次に、「共感力」には、「中止要因」と「継続要因」が影響している。「中止要因」には、直接的にはボランティア自身による「罪悪感」と「無力感」が関係している。「罪悪感」と「無力感」の背後には、相互に影響しあうボランティア自身の「トラウマ」と「ストレス」が位置している。一方、「継続要因」には、ボランティア自身による「共感の再構成」が直接的に関係している。「共感の再構成」の背後には、「共感への集中」と「共感の制限」、そして「共感からの離脱」が関係している。特に、「共感からの離脱」は重要である。一旦共感から離脱することで、活動が継続することになるのである。

##### 4) 対人援助における「共感疲労」と「共感満足」の関係

第4に、ボランティアの継続要因およびボランティア支援特性の構造とプロセスの提示により、対人援助における「共感疲労」と「共感満足」の関係解明に向けて示唆を与えた。

先行研究では「共感疲労」と「共感満足」の構成因子として、対人関係を中心にそれぞれ4因子が提示されている(藤岡 2008)。しかし、両者の関係は不明であった。本研究により、限定的ではあるものの、関係は相互的であることが定性的データでもって確認することができた。また、援助者が「共感疲労」に至る過程は、Figlayによると「共感能力 共感応答 共感ストレス 共感疲労」であり(藤岡 2008)、その要因として「長期間の曝露」を挙げている。本研究により、この「曝露」を防ぐ共感の「制限」および共感からの「離脱」の内容と構造についても、定性的データ分析により具体的に提示することができた。そして、「共感疲労」ではなく「共感満足」になる決定要因は、援助者の「感情表出」「自己援助」「資源活用」「明晰な内省力」「判断力」の5つである(Radayら 2007)。本研究により、高齢者の孤立予防に関わるボランティアの場合には、「共感満足」の決定要因として、[目標の再設定][対象者理解の深化][限定的な達成感]の重要性が示唆された。

### 5) 韓国との比較検討

第5に、韓国における高齢者の孤立予防に関わるボランティアとの比較検討を行い、相違点と共通点を明らかにした。

韓国でも高齢化が進展し、高齢者の一人暮らしは多く見られる。高齢者の「孤独死」も大きな社会問題となっている。しかし、高齢者の孤立予防に向けて、ボランティアの関わり方には両国に大きな違いが見られる。韓国では、金銭的な寄付と比べ、対象者に直接関与するボランティア活動はそれほど活発ではない。したがって、韓国では、特に都市部において、高齢者の孤立予防の取り組みでも、ボランティアは集まりにくく、その役割は大きいとは言えない。無償で、しかも社会貢献的な高齢者によるボランティア活動は、日本の方が進んでおり、韓国の現場では日本での成果を活動のモデルにしている状況にある。一方、共通点も多く見られる。性別では、韓国でも高齢者の孤立予防に関わるボランティアは女性が圧倒的に多い。女性しかも高齢の女性が多い。

ボランティアの継続要因は、ボランティア自身の有する社会貢献願望によるところが大きい。社会貢献をしたいと思いボランティアを始め、自分の成し遂げた成果を実感できるからボランティアを続けている。「何かを社会に返したい」という社会貢献の気持ちがあるが、活動継続を可能にしているのである。また、ボランティアの多くは、自分の趣味を生かして活動している。自分のしたいことをするという、自己実現願望によるところも大きい。そして、何よりも活動そのものが楽しいからボランティアが継続している。社会貢献願望、自己実現願望、個人的な理由はいろいろあっても、活動していて楽しいから活動も継続することになる。なお、「共感疲労」への対処法としては、「学習する」「旅行する」「仲間と話をする」等が明らかにされた。「共感疲労」は周期的にやってくる。「共感疲労」に陥らないため、ボランティアは自分で「癒す」必要が出てくる。特に「旅行する」は、対象者との関係から一旦離れることであり、本研究で明らかにされた{共感からの離脱}に類似するものである。また、活動には「ガイドライン」が設定されており、「自分でできないことにはタッチしない」ことになっている。これなどは、本研究では{共感の制限}に該当するものである。

最後に、高齢者の孤立予防に関わるボランティアへの支援特性としては、韓国の場合、金銭的な支援が多く見られた。公共施設利用料の減免、大学の授業料の免除、文化イベントへの招待等である。それ以外には、活動に参加するボランティアへの特別な支援は行われていないのが現状である。

## 5. 主な発表論文等

- ・高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続特性 - ボランティアの「楽しさ」に焦点を当てた定性的データ分析 -、村社卓：社会福祉学（査読あり） 58（4） 32-45、2018.

〔雑誌論文〕(計1件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

- ・調査研究報告書：高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力の構造、村社卓、全29頁、2019.

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：鄭 丞媛(新見公立大学)  
井上祐介(岡山県立大学)

ローマ字氏名：Seungwon Jeong  
Yusuke Inoue

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。